

されていない。そこで、今回、我々は、当科の入院患者のうち、SLEの疑われた23例にLBTを施行し、その結果を、臨床所見との関連において検討したので報告する。

対象：当科に入院した腎疾患患者23名を対象とした。内訳は女性17名、男性6名である。

方法：前腕伸側部、顔面などの露出部、および、臀部、下腹部などの非露出部の皮膚を生検し、即座に凍結した組織をクリオスタットにて凍結切片とした。直接蛍光抗体法にて、IgG, IgA, IgM, C<sub>1q</sub>, C<sub>3</sub>, C<sub>4</sub>, フィブリノーゲン、プロパージンについてその染色性を検討した。

結果：LBTを実施した23例のうち、臨床的にSLEと診断されたものは12例であり、このうち9例はLBT⊕、3例はLBT⊖であった。臨床的にSLEでないと診断された9例(MCTD 2例、ネフローゼ2例、PSS 1例、慢性腎不全2例、慢性関節リウマチ1例)は全例がLBT⊖であった。臨床的に診断が確定しない2例では、1例がLBT⊕、1例がLBT⊖であった。上記の如く、SLEにおけるLBT陽性率は9/12=75%。偽陽性は0%であった。

考察：SLEはその臨床所見が多岐にわたり、他の膠原病との鑑別診断がしばしば困難である。今回の結果では、SLE以外の疾患でLBT⊕となるものはなく、本法はSLEの診断にきわめて有用であると考えられる。

## 10. 大腿骨頸部骨折の治療経験

(整形外科)

○三宅 俊和・土方 浩美・豊島 弘道・  
下出 真法・田川 宏

近年平均寿命がのび、それに伴って老人の整形外科的疾患も増加し、高齢者の大腿骨頸部骨折を治療する機会もふえてきた。そこで昭和53年11月～昭和58年12月に当科で治療した大腿骨頸部骨折113例中100例を頸部(内側)骨折、転子部骨折に分けて検討してみた。

両骨折とも50歳以上に多く、70～75歳にピークがみられた。合併症は72%の症例にみられた。糖尿病、高血圧・心疾患、脳血管障害、精神障害など多彩で、重複例もみられた。

観血的治療は81例に行ない、合併症のために手術不能例は3例であった。

頸部(内側)骨折(57例)ではstage II, III, I (Gardenの分類)の順に多くみられ、stage II, IIIでは人工骨頭、compression hip screenで治療され、stage Iでは保存

的またはknowles pinningで治療されていた。

転子部骨折ではstable type (Evans分類)が多くstable type, unstable typeともにcompression hip screenで治療されていた。

術後成績では両骨折ともにcompression hip screenがすぐれていた。

## 11. 石灰乳胆汁の1例

(外科)

○町田 浩道・三橋 牧・土生 洋一・  
瀬下 明良・安部 龍一・村田 順・  
中川 隆雄・大地 哲郎・木村 恒人・  
馬淵 原吾・鈴木 忠・倉光 秀麿・  
織畑 秀夫

石灰乳胆汁は従来、比較的まれな疾患であるとされている。今回われわれは、腹部単純撮影にて、胆嚢陽性像を呈した典型的な2例を経験したので報告する。

症例1：7歳、女児。右上腹部痛を主訴に入院。腹部単純X線撮影にて右季肋部に石灰化像有り。胆嚢造影で胆嚢内に結石を認めた。また、血液検査より球状赤血球を指摘された。石灰乳胆汁、胆石を合併した遺伝性球状赤血球症と診断し、胆摘、脾摘術施行。胆嚢内に石灰乳胆汁および胆石を認め、胆石は頸部に入り込んでいた。脾臓は腫大し、暗赤色を呈していた。

症例2：24歳、女性。右季肋部痛を主訴に入院。発熱、黄疸なし。腹部単純X線撮影にて、右季肋部、胆嚢に一致する部に石灰化像を認めた。同陰影は体位による変形はない。胆嚢造影で胆嚢内へ造影剤の侵入はなかった。以上より石灰乳胆汁の診断で胆摘術施行。胆嚢は全体に萎縮し、胆嚢内に黄白色、ゴム様軟の内容物を認めた。内容物の化学分析にて炭酸カルシウムが90%以上であった。

## 12. メッケル憩室の腸間膜欠損による絞扼性イレウスの1例

(外科)

○三橋 牧・土生 洋一・町田 浩道・  
瀬下 明良・安部 龍一・村田 順・  
大地 哲郎・木村 恒人・馬淵 原吾・  
鈴木 忠・倉光 秀麿・織畑 秀夫

メッケル憩室はメッケルにより、胎児性腸間膜管の不完全閉塞による奇形であると報告されて以来、比較的多数の症例が報告されている。メッケル憩室の外科的合併症として腸重積その他の腸閉塞、憩室炎、嵌頓ヘルニアなどがある。今回私達は、メッケル憩室の腸間膜に欠損を認め、その欠損部に小腸が嵌頓し、絞